



外野(吉)重(正)著

浪華の楳

大塩詰

二編下

木宗梓

10 15 20 25



010190510951

A 467  
47

三編上巻不登族の事... 大坂市中の事件起り... 傳聞有... 里敷を... 上... 時日を... 統へ

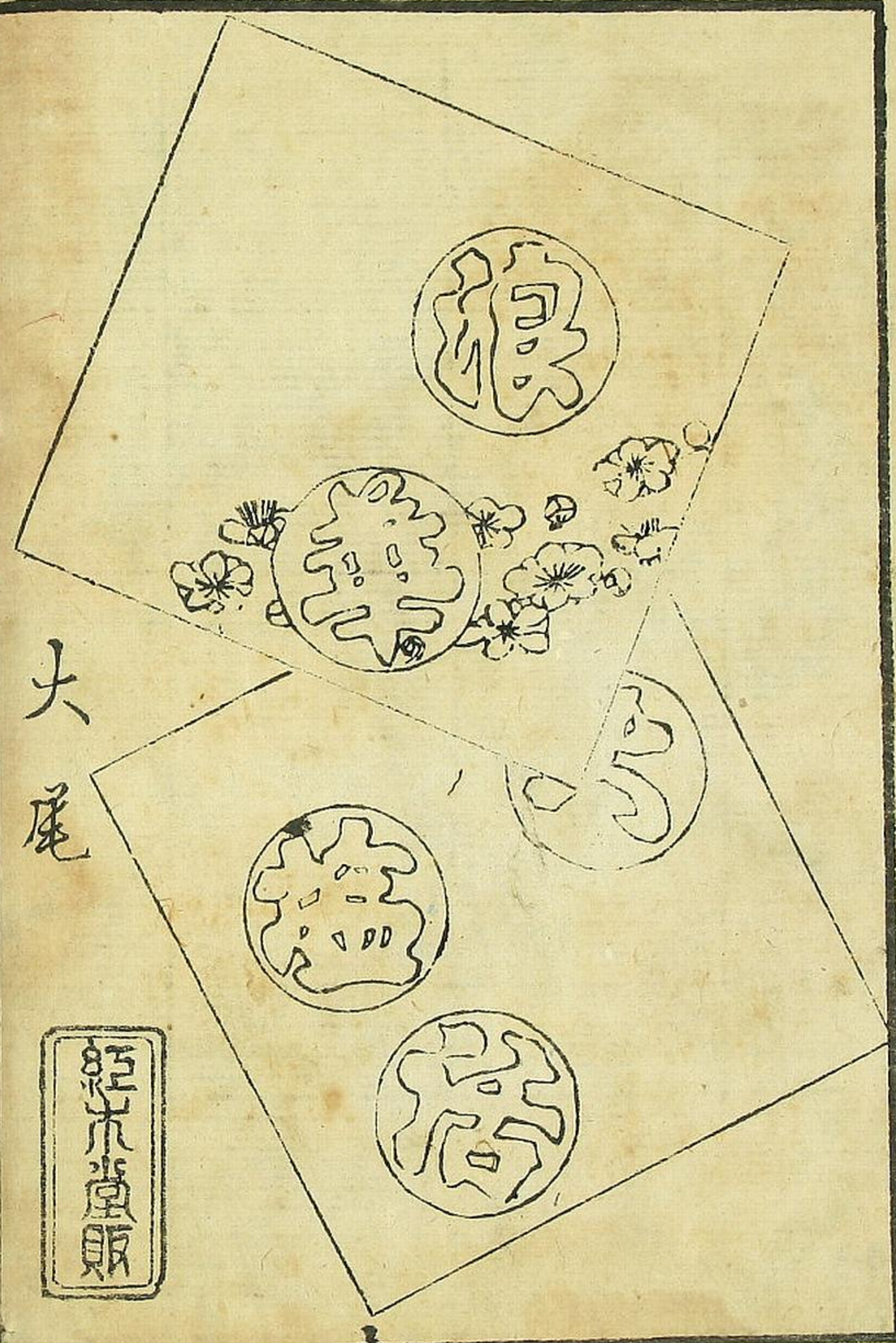
天命致天誅  
と記神社佛  
殿へ下置より  
巻下平八郎門  
下味の内平  
山助次郎との  
者未じが傳  
るを考ごる

奉行山守



ふ今天下泰平... 奉行の對し... 同然不忠... 忠を

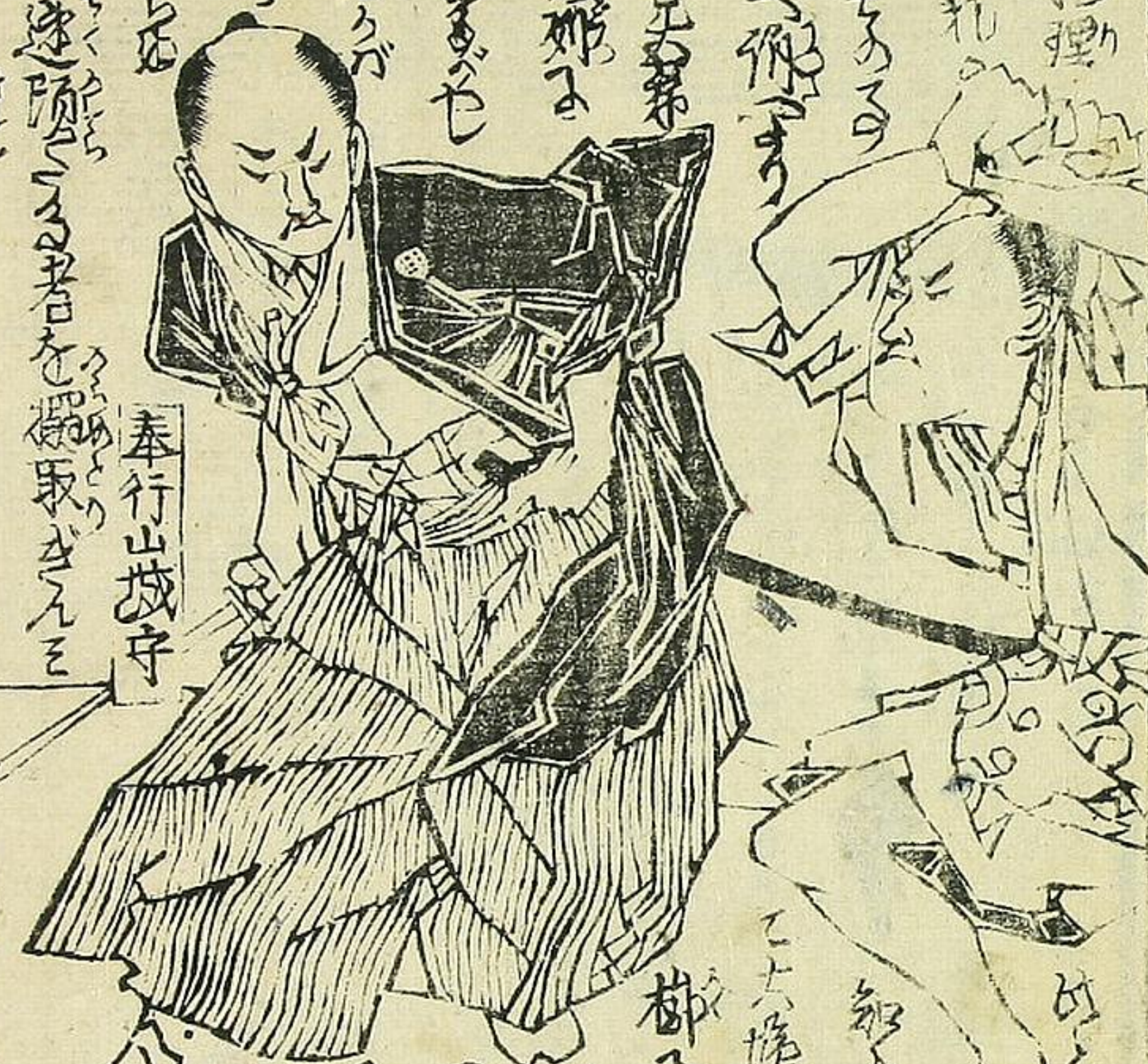
平八郎... 罪人... 銀して



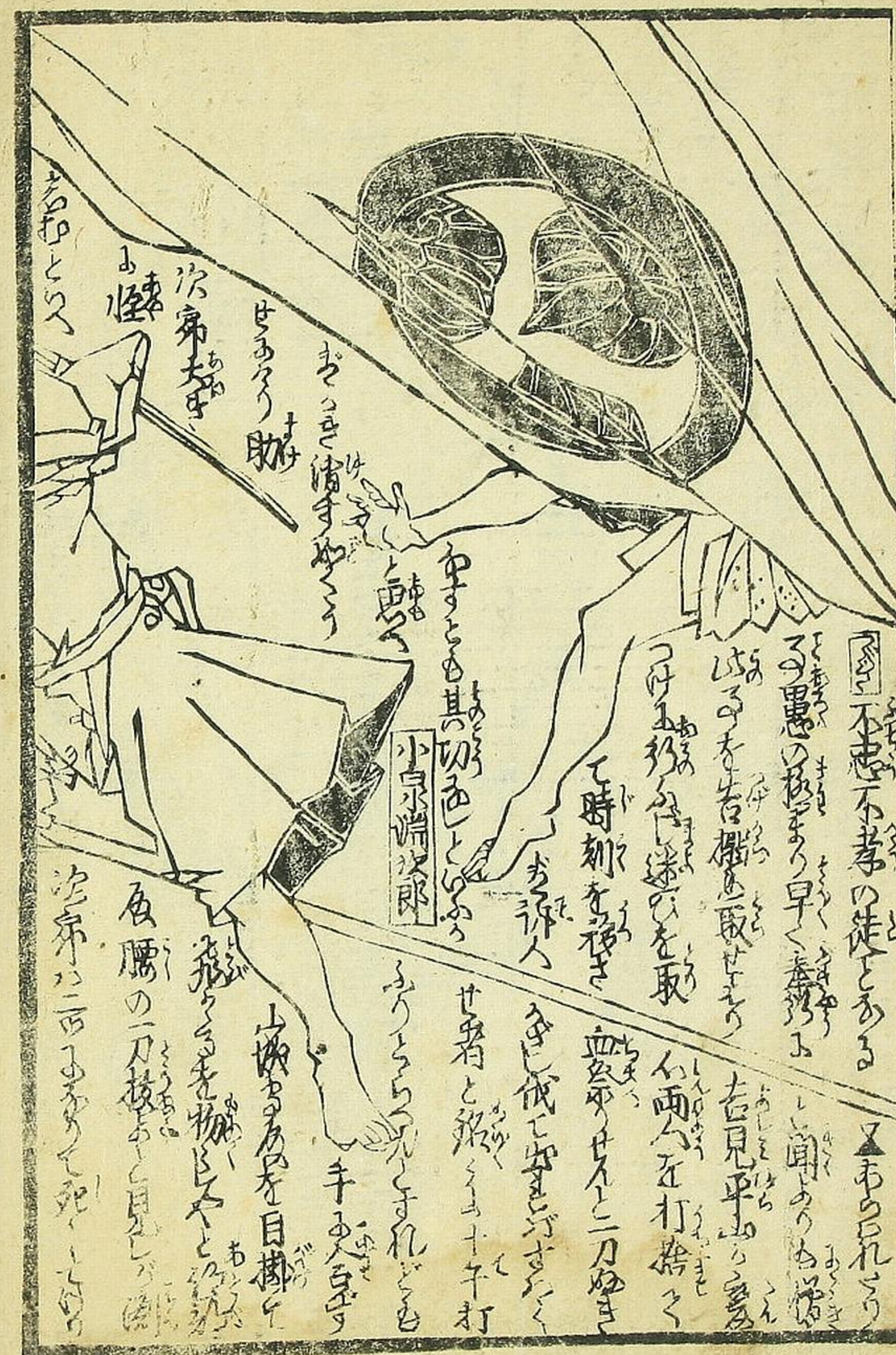
48-8733



の當然おれ  
 はんを法つてその  
 早々倫教を傳へり  
 してきて吉見の系  
 目より後徳の那も  
 加ひかんをひまも  
 早々後をせしうか  
 山嶽の色は  
 を聞かまうら  
 大事なり早速隨  
 有七と評義あり初  
 日の夜山嶽不レ



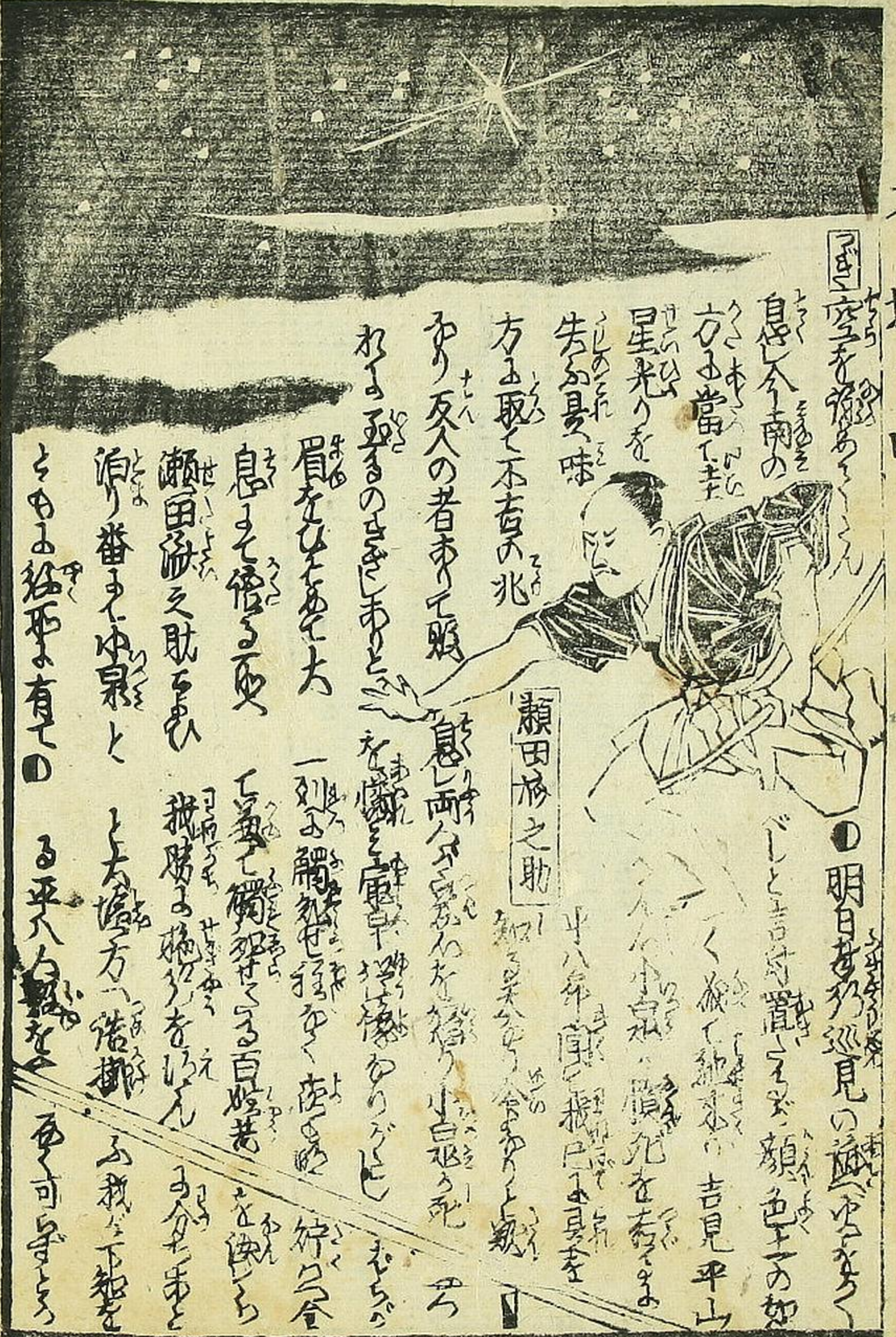
奉行山城守  
 平八郎と云ふ者  
 其外用意を  
 明水二月十九日  
 の大徳達せん  
 忠を懐浪迎  
 近巻梅玉  
 平八郎と云ふ者



小泉端政郎  
 其切ふといふ  
 助  
 次弟大守  
 小泉端政郎

不忠不孝の徒とある  
 又おれり  
 子愚の極まり早く  
 時刻を後  
 手  
 山嶽を  
 血  
 廿者  
 手  
 平八郎





空を流るる

息今南の

方小當てま

星光の香

先ふ曼味

方ふ取て不吉の兆

あり反人の者ありて

わらざるのまきありと

肩をひたを大

息もそ倍も夜

瀬田流之助を

海り番まで中泉と

ともよ結形有て

明日は乃巡見の極中を

く顔色その如

く顔て絶本の吉見平山

小泉の廣九を

十八年申の我巳の

知る天を

息し所分を

を懐く軍早

一列の觸れ

て海に觸れ

我勝る極

と大塔方

る可事

見移れ九三百の勢あり

家も林も直

を不現を先

呼ぶ平八郎其

日の出立の

桐の影を

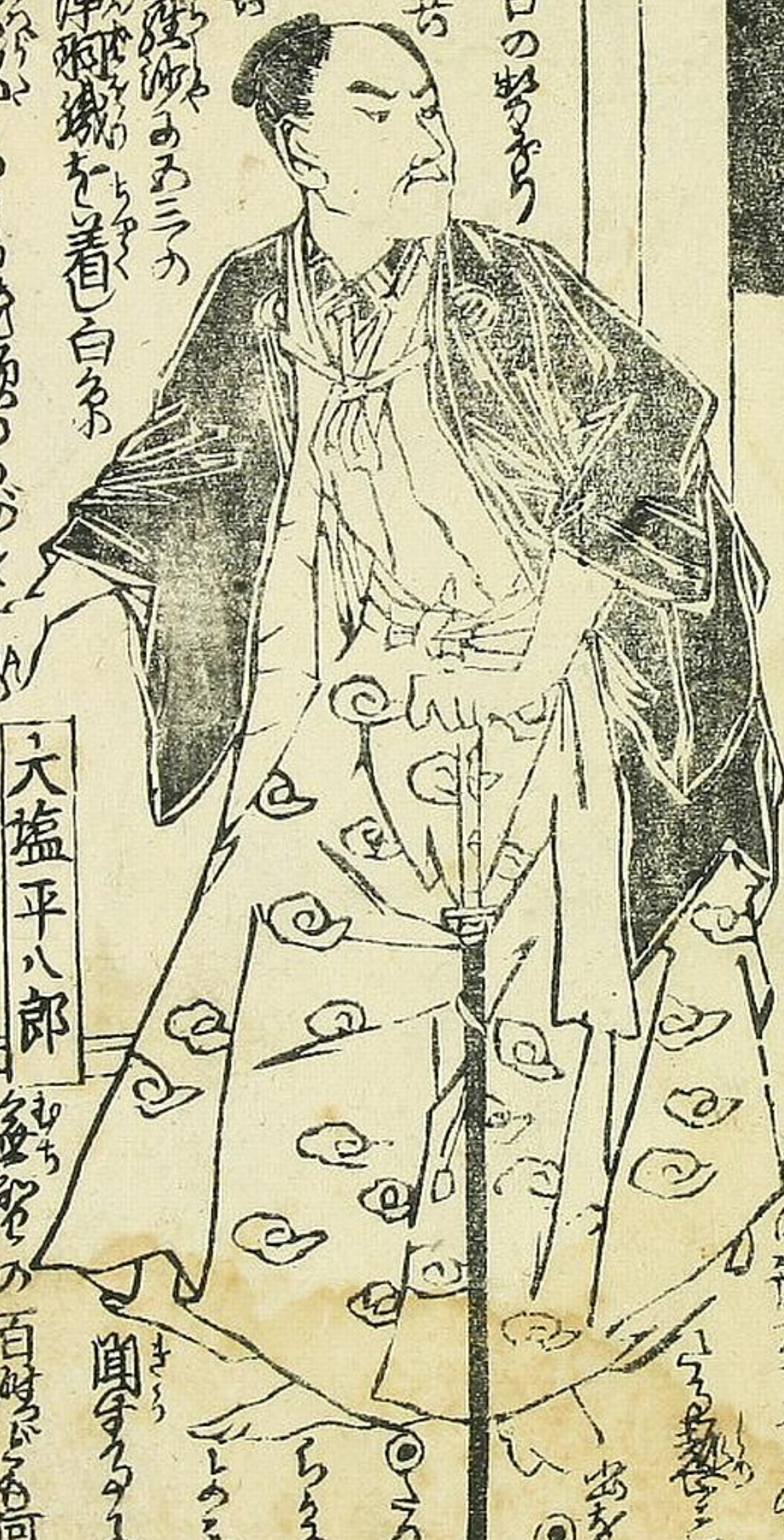
おじのまらひ

を楮のまらひ

瀬田流之助

着て威風

一歩らずと



大塩平八郎

秘智の百

りの御佛

を平八郎

皆の力

の法方

の御

の御

の御

の御

の御

の御

の御

の御

の御

の御

の御

の御





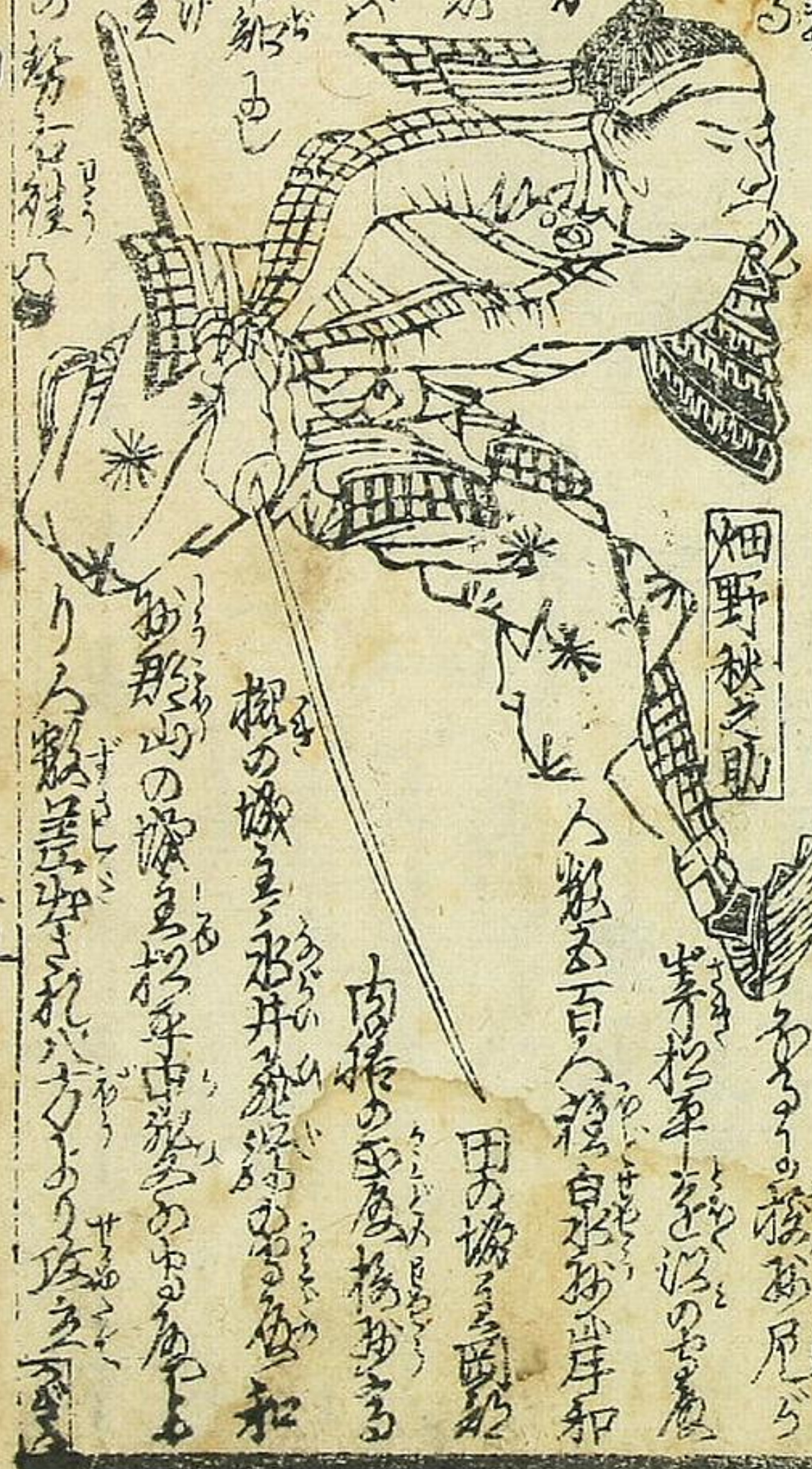


平八郎の如く合して益あき町人亦  
 命を事争老婦人小児のみを  
 持てて然る内より秘ひかし  
 立退きけりさそ曲身なり城  
 の内なるも前をさあし  
 の内なるも前をさあし  
 の内なるも前をさあし  
 と死あふまの太鼓  
 先陣大塚格と助  
 松本林方丈庄司殿  
 左馬門角りゆの侍と  
 結うけり山城のとも  
 何なる行隊しあふま



左往る馬をりり大塚平八郎の通  
 後陣の床机の掛りて下紐をゆるる  
 山城のともある一勝大塚格ひ打んと  
 はあつ地食を平八郎を見するさうさう  
 と切付あふ平八郎物の敷とせす持る  
 陣崩れを居がら具を受留り  
 は体を刃を渡辺大井地  
 うりて渡り合ふ事す  
 の山城のともある一勝大塚格ひ打んと  
 ぜいよ敷とて馬を返して

後陣の如く合して益あき町人亦  
 命を事争老婦人小児のみを  
 持てて然る内より秘ひかし  
 立退きけりさそ曲身なり城  
 の内なるも前をさあし  
 の内なるも前をさあし  
 の内なるも前をさあし  
 と死あふまの太鼓  
 先陣大塚格と助  
 松本林方丈庄司殿  
 左馬門角りゆの侍と  
 結うけり山城のとも  
 何なる行隊しあふま



頼田海之助  
 島ヶ原の戦ひに左馬門の川中  
 白けれん信長 戦ひあまも  
 惚ろろと見えぬ者感思ひ  
 けり振も双方とも入  
 知り強ひ来るか  
 柴松平を以ての  
 田の橋を圍む  
 肉指の平度橋あり  
 和  
 補綴名は方先本勢に







大塩平八郎の重構の日の早暮を曾々

それゆゑ天を焦して里頼の四方も驚き以て後絶た

叫びの音すまはる諸人の驚き天地を動じ

さきさき修羅の街のさきさき大塩平八郎の

を自らたげ離れ味方存して死闘の

捕て思ふこころ目のゆめはれ世有極

と捕へ君の大塩平八郎

格助さあれおれを

さあれおれを月舟して下先

海をせあふ極動の申す流

り君も下を以て極力をお

ちのびぬひりおれ共行れ

この共おれ共おれ共

このおれ共おれ共



と見驚き大塩平八郎

の二々昔は平八郎

と一々今を平八郎

きを助あかり切捨

まは思慮を其後

操の操じて回悪を滅せんと

るを悪悪しす肉の大塩氏と

今々法務の多きを聞かば

市おれんやおれん今速吉奉

をねして君の操を

ひじく君の内身も

報めん丸軍の中を



旅僧

大満の作

是も大塩平八郎

先流さんと

平八郎のせい

のひけり

操を

死在

あまの

呼り

出操

ひ







